

兵庫医大と神戸大学
3人の医学生と
石川康宏教授が、
(神戸女学院大学)
いろいろ話しました

医師になって、知識を どう世の中に活かす？

学生時代にいっぱい考えたいね

医学部に入学したら医療の専門的な学習をしますよね。でもそれだけでいいのでしょうか？

神戸大学と兵庫医科大学の医学生が、石川康宏教授（神戸女学院大学）の研究室におじゃまして「学生時代に何をどう学ぶか」について、いろいろお話をしました。

樽谷 こんにちは。今日はよろしくお願いします。

ぼくは神戸大学医学部医学科の4年生です。卓球部に入っています。来年から病院実習が始まるので、C B Tのテストを合格するため頑張ってます。今は友達と雑談するのが一番楽しいかな。

田口 神戸大学医学部医学科1年生です、大学での勉強は一般教養ばかりで、医学の勉強はまだ始まっていません。大学で硬式テニスを始めました。

谷崎 兵庫医大の1年生です。軽音部に入っていて、サッカー部のマネージャーもしています。今は両方オフシーズンでヒマなので、バイトを始めようかなーと思ってます。兵庫医大では1年の後期から基礎医学が始まっています。年末におせち料理を作るのが楽しみです。

石川 ぼくは、95年の震災の年に神戸女学院に赴任しました。ちょうど20年です。58才ですが、若い世代を育てることにもう少し力を注がねばと思っています。

学生時代は 一年に本棚一本分、本を読もう

谷崎 石川先生が書かれた本の中に、学生時代は一年に本棚一本くらいを目標に本を読もうと書いてありましたけど、結構な量だなーと思って。先生はどうやって読んだんですか？



谷崎安依さん
(兵庫医科大学1年)



左から谷崎さん、田口さん、石川教授、樽谷さん
(石川教授の研究室にて)

石川 6段組のラックだと、分厚い本が180冊ほど入ります。2日に1冊読むのは実際に大変なんですけど、でもそれができる人間になりたい。そういう自分への期待や励ましから来た言葉です。考えてみてください。年180冊読んでも大学の4年で720冊。町の小さな本屋さんのほんのひと隅分です。ありません。

そんな知識では自分に自信がもてない、大事な問題の判断もできない。そこを突き抜けるためには大量の知識が必要で、手元にたまる本の数に追いつこうとする姿勢がいると思います。

谷崎 最初読んだときは、本棚1段のことを言うのかと思ったんですけど、本棚ひとつ全部のことだったんですね(笑)。

今は時間に追われて忙しくて、しないといけなことが次々あって、時間がないんです。

時間がなくてもほしいと思えるほど夢中になることって、どうしたら見つかるんでしょうか？

石川 社会や人の生の姿に関心をもつことかな。現実への憤りは生きる力の大きな原動力です。ただ、いつの時期にというのは人それぞれ。ぼくは学生運動を終えて、学者になろうと思い、実際になるまで10年以上。その間は禁欲的な勉強の日々です。再び、やりたいことができるようになったのは、38才になってからでした。誰もが20才前後で夢中になれる何かを見つけられるわけではない。そこはめぐりあわせですよ。

大学で、 友だちと熱く議論したりする？

樽谷 僕は医学部だけど、医学以外にも必要な勉強があると思います。でも大学では、友達とあまり頭を使わないような雑談しかしないですね。みんなはどうですか？

田口 私も、友達と熱く議論することなんてなくて、こんなお店があっていいよねーみたいな話ばかり。

谷崎 私は、兵庫県の地域枠推薦で入学していて、卒業後9年間、県の指定する病院で働かなくてはならないんです。

田口 私も同じ地域枠推薦です。

谷崎 だから、9年間の中で、どうやって働くか。結婚のことや子どもを産んでも働けるのかとか。一人の人としてどうなのか…というようなことは、同じ地域枠推薦の子とは熱く議論しますね。

田口 そうですね。

石川 うちの学生と話題は変わりませんね(笑)。そのうちの学生も、学費が高いから大学に通えない、お金がないから病院に行けない。そういう人がたくさんいる事実を知ると憤ります。昔のぼくもそうでしたし、みなさんもそうじゃないですか？ぼくにとってはそれが学者になろうとするきっかけでした。

ただし、学者にもいろんな意見の人がいる。学者として何をすることが問われます。医療の専門的な知識と技量をもつだけでなく、それを社会の中でどう活かすのか、そこに考えるべき独自の問題があるわけです。

一人前の医師になった上で 自分は社会とどうかかわるのか

樽谷 どんな医師でも死ぬまで勉強する必要があります。でも僕は今、試験に受かるという目的のために勉強をしています。医師になって一定のポジショ



石川康宏教授

ンを得たら、目的が見えなくなって、勉強するモチベーションが下がるんじゃないかなーと思うんです。医師になったら、何を見据えて勉強したらいいんでしょうか。

石川 医師になることが目的なら、それで燃え尽きるかも知れません。でも、たとえばぼくにとって学者は目的ではなく、よりましな社会をつくるための手段でした。ですから、学者になってからが本番で、燃え尽きなんて考えられませんでした。「一人前の医師になった上で、自分は社会とどうかかわるのか」。そこをみなさんにも考えてほしい。

田口 夏休み、尼崎医療生協病院へ実習に行って、実際に患者さんを受け持って話を聞いて、すごく刺激を受けました。

介護保険や障がい者の法律の話が出てきたんですけど全く知らなくて、「自分は何も知らない。知らないと何もできない」と思いました。でも政治や社会のことって、学ぶ場がないんです。広い視点で、どうやって学んだらいいんでしょうか。

石川 ネットの情報では体系的な知識は身につけません。医学も同じでしょ。しっかりしたテキストに学ぶ必要がある。同時に、社会の出来事に目を開きたいなら、大きな本屋さんの新書コーナーを隅から隅までながめるのもいい方法です。世の中にはいろんな問題があり、それを考えている人がいる。自分の知識がいかにかっぽけなものかわかります。新書ならすぐ読めるので、それで自分にじっくりきたものを選べばいいです。そういう風に本屋さんを利用する時は、2時間くらいを覚悟して行かねばなりません。

新しい問題に直面した時 自分の枠を広げていく

谷崎 私は小児科医になりたいって思っていて、それでこの間、「貧困と子どもの健康シンポ」にも参加したんです。

でも、民医連の医学生対象の学習会とかでいろいろ学んで、小児科だけじゃなくて、高齢者とか障がい者とか、紛争地域のこととか、大変なことは他にもたくさんあることを知りました。そうしたら、小児科だけでいいのかと後ろめたい気持ちにもなります。だから悩んでしまって、いったいどこから手を付けたらいいのか…。

石川 最初はかなり偶然ですね。ぼくもあらゆる社会科学を知った上で経済学を選んだわけではありません。だからこそ、この道でいいのかという問い返しがずっと必要です。最初の偶然に閉じこもる必要はない。そうやって自分を点検することで、視野を広げていくことができます。

たとえば先日、政府が子どもの貧困を調査しました。結果は、子どもの6人に1人が相対的な貧困ライン以下の暮らしということでした。平均的な日本人の暮らしのその半分以下のレベルということですから、そうすると三食まともに食べられない子どももたくさんいる。そこで政治の責任を問いつつ、目の前の子どもにゴハンを食べさせようと市民が連帯して「こども食堂」という運動が広がっている。こうして新しい問題に直面した時に、それを「専門外」と遠ざけず、よりましな社会づくりの重要課題ととらえていく。そうやって自分の枠を広げるのです。

はりきってカニ鍋をつくったら、これまで一度もカニ食べたことのない子どもが気持ち悪がって食べなかったとか、カニ用のポン酢を白いゴハンにかけ

て食べてしまったとか——そういう食べ方を日頃からしているということです、友だちと遊んでいてもいっしょに駄菓子屋に行くことができず遊べなくなった、そのまま不登校になってしまったとか、給食が食べられなくなる夏休みに子どもがやせるとか。聞くのもつらい話がたくさんありますが、それが子どもの貧困の実態です。

こういう子どもは病気になったとき医者にかかれるのでしょうか？ 家に保険証はあるのでしょうか？ 人の命と健康を守る仕事を選んだみなさんは、そういう子どもがたくさんいることを「専門外」と突き放すわけにはいかないでしょ？



田口真理子さん
(神戸大学1年)

「社会の一員として生きる」 姿勢と能力を持たないと

田口 たとえば、医療倫理といったことなら私もしゃべることができます。でも、貧困や安保健法、政治・社会のことはあまり知らなくて、何も発言ができません。SEALDsの人たちは、自分の意見をはっきり発言していてすごいと思います。どんなことを考えているのか知りたいです。

石川 人が社会の担い手に育ちづらい社会になっています。社会が見えない大人がふえるのは、為政者には都合のいいことです。消費税増税はゴハンの食べられない子どもにも増税です。でも、他方で大企業の法人税は、どんなに儲かっているのに減税です。おかしくないですか、人の社会として。教育とメディアが、そういう問題に気づきづらい大人をつくらせている。

政治や社会についての教養が足りないという自覚が必要で、そこを埋める意識的な努力が必要です。みなさんは医療の専門家になるわけですが、「医療しかわからない」ではだめなんです。もう一方で「社会の一員として生きる」姿勢と能力をもたないと。

ぼくは「憲法が輝く兵庫県政をつくる会」の代表として県知事選挙にも取り組んでいますが、そこには大きな力を出してくれる医師がたくさんいます。住民の命や健康を守ろうとする立場の延長です。選挙で応援演説もしてくれますよ。こういう人は社会にとって宝です。

SEALDsのメンバーは、会えば普通の学生です。



進路に迷ったり、就職に悩んだり。ただ日本を戦争に巻き込んでいく安保法(戦争法)の実態を知って、居ても立ってもいらなくなった。それで行動しているということです。

患者を通じて 社会の姿が見えてくる



樽谷雄介さん
(神戸大学4年)

樽谷 医師の世界は閉じられた社会だと思うんです。だから医師とは別に、同じような考えを持つ人との交流も必要ですよ。仕事と関係なく組織に属したりすることが大切なんじゃないですか？

石川 人それぞれでしょうね。医師になればたくさんの患者を診ます。そうすると患者を通じて社会の姿が見えてきます。

この人はなぜ病院代に苦勞するのか、この人はなぜ体を休めることができないのか、どうして十分な栄養がとれないのか。その時に、それを「専門外だ」と突き放すか、「同じ社会に生きる人の問題だ」ととらえられるか。そういったことによるのでしょうか。

先日、出雲市で戦争と平和について話した会場に、

医学生が来ていました。SEALDsの集会に京都まで行って参加したそうです。これからどうすればいいかと相談されましたが、「焦らずに育とう」と答えました。「社会の一員」としてはすでに問題意識を持っている。だから、むしろ医師になる勉強をしっかりと。そこは人生を長くみでの判断が必要です。



知識・情報の枠を超えて 自分で自分を育てる力



石川 うちの学生には「大人」には3つの能力が必要だと言っています。自分で生きる力、社会のどこかを支える力、自分で自分を育てる力です。それを学生時代に身につけねばならない。医学生の場合には、医療の現場で役立つ力、それを社会にどう活かすかを自分で考えることのできる力といったところでしょうか。ぜひ、大学で与えられる知識・情報の枠を超えて、自分を自分で育ててください。期待しています。

樽谷・谷崎・田口 ありがとうございました。



僕は、あと2年で医師になる。でもそれで終わりではなく、先を見据えて考え、医師になってからもっといろんなことに考え及ぶことができるようにしていきたいです(樽谷)

いろいろ考えながら、知識をためて、発言と行動ができる大人になりたいと思いました(田口)



先生の話を聞いて、医学以外の勉強もしないといけない。とりあえず本屋に行こう。興味のあることから学習しようかなと思いました(谷崎)

石川康宏教授プロフィール

1957年北海道生まれ。神戸女学院教授

(経済学) 主な著書は以下の通り。

『社会のしくみのかじり方』(新日本出版社)、

『21歳が見たフクシマ、ヒロシマ』

(ゼミ著、新日本出版社)、

『若者よ、マルクスを読もうI・II』

(共著、かもがわ出版)、

『「おこぼれ経済」という神話』(新日本出版社)、

『女子大生のゲンバツ勉強会』

(ゼミ著、新日本出版社)、

『女子大生と学ぼう「慰安婦」問題』

(ゼミ著、日本機関紙出版センター)